

の ない 港

桂
英
澄



略 歴
1918年東京生れ
京大哲学科卒

一九六二年二月二十日 第一刷発行

船のない港

定価四〇〇円

著 者

桂

英

澄

浦和市岸町四ノ一六二

発行者

葦

沢

謙

印刷者

大洋印刷産業株式会社

発行所

東京都千代田区
神田神保町一ノ二

審

美

社

電話(三六)一〇二一・〇三二四
振替東京七二二七五

船
の
な
い
港

中山手にある綿貫さんの家で、はじめて彼に会ったとき、私はなんとなく綿貫さんに頼る気になっていった。

「君、やりたまえ」

と、新しい煙草の口を切って私の前に置く。

その調子のなかに、人を使用するものの腹の底にひそんでいがちな傲慢な嫌らしさが感じられず、目下のものを劳ろうとする自然な気持がよく分る。なにかしら、世間の常識的なやり方に、意識して抵抗しているようなところもあった。

いい人だ、という気持で、私は四十半ばの小柄な紳士の顔を見上げた。

どこか体でも悪いのか、顔の色が沈んで冴えず、これといってなんの迫力も感じられないけれども、話していると、温厚な人柄がにじみ出てくる。

「君は、どうして船の方をやるうと思うの？」

と、綿貫さんに訊かれたとき、私は、ちよつとまどつたなかで考えた。

私には戦後の空白な気持を突破し、清算したいという意志もあつた。

それよりも、家にはもはや全財産三百円足らずしか残って居らず、妻子を抱えて、私とはとにかく何処かへ勤めなければならぬ破目に立たされていた。私はとっさに、

「僕は、子供のときから海が大好きなんです。いっぺん、大きなヨットに乗って、航海してみたいと思つてゐるんですが……」

と言つた。心なしか、綿貫さんは狼狽えたようにそわそわして、ちよつと顔をしかめ、それから改めて私の顔を見直した。

私は、まずいことを言つてしまつたのではないかしら、と心配になった。

すると、自分の言つた言葉が、にわかに現実ばなれのした、途方もない世間しらずのよるに思えてきて、とつぜん変な焦燥が襲つてきた。

実際、私は世間というものの実体を、まだ何も知らないといってよかった。

私は学校を出ると直ぐ軍隊に入り、半歳ほど経って胸を悪くして還ってきた。それから終戦まで二年ほどのあいだ、結婚したばかりの妻と一緒に両親の家で療養生活を続けた。

その間、私は血肉のわずらわしさや、そのような時代に、妻を抱えて遊んで暮らす精神的ないたたまらなさを味わったが、まだ世間という、第三者との対人関係に就いては、なにも知らなかった。

軍隊での生活を通して、私は、人間の裏面の奇怪な相貌をかいま見た思いだったが、それでも、経験というのにはあまりに短か過ぎた。

それだけに、初めてぶつかった赤の他人である綿貫さんに会って、なにかほっとし、にわかに勇み立ってきたのだ。

私は、手頃な働き場所を与えてくれた運命に、感謝するような気持ちになった。私は、これから自分のやらねばならぬ大体の仕事に就いて訊いてみた。

綿貫さんの話では、大阪のKという船会社が、朝鮮との貿易に早晚許可の降りるのを見越して、まっ先にその利権を獲得するために、いま、G・H・Qに対して、猛運動をつづ

けている。

綿貫さんはいちはやくK商船にとり入って、許可が降り次第、門司⇨神戸間の内海航路の下請けをする約束になっているとのことだ。それが決定するまでは、はっきりした仕事の当てもないが、とりあえず神戸に事務所を置いて、仕事になることは何でもやってゆくということであった。

話の様子では、どうもいまのところ、私以外には正式の社員など、誰も決まっていないうだ。私は、これからどういうことをしてゆくのかさっぱり分らなかったが、やれるところまでやってみようと度胸を決めた。謂わば、ふと何かを感じた綿貫さんの人柄だけが頼りだった。

「綿貫さんのお船は、何トンくらいあるんですか？」

と、私が訊くと、綿貫さんは再び何か狼狽えたようにそわそわして、

「うっ……」と、つまったような声を出したが、

「百五十トンの機帆船なんだよ。終戦まぎわに丸亀の沖で坐礁してそのままに放ってある。一度見に行かなきゃいけないんだが、忙しくて……」

と、遠くを見るような目付きをした。

終戦の翌年勿々から、私は、綿貫さんが新らたに開くという、神戸の小さな店に勤めることに話が決まった。

一月の十日ごろ電報がきて、ふたたび綿貫さんの家に行った。小じんまりした二階建ての、極く小市民向きの家である。このまえ通されたのは二階の座敷であつたが、今日は階下の部屋の長火鉢のまえであつた。

背広の下にえび茶のジャケットを着た船員くずれのような体格のいい先客が坐っている。中沢さんといって、以前は大阪の船会社Kの専務の下に働いていた人だが、いまは石炭、コークスなどを扱う商人になつてゐるのだそうだ。

気性はさっぱりとして、ものにこだわらず、豁達によく饒舌るけれど、どうかした角度から見る視線が二重のようにみえ、その底に、きらりと異様に鋭く光るものがある。これから一緒に仕事をする機会が多いとのこと、私は今後宜しくと頭を下げた。

綿貫さんも中沢さんも、最前から話が弾んでいるようで、もう相当に酔っている。

中沢さんが棍棒のように頑丈な腕をみせて把んでいるコップには酒が入っているらしい。

綿貫さんの家の玄関の土間には、ドラム鐘に入った純粹のアルコールが置いてあり、来客には、これを水で割って出すのである。君も飲まんかと、綿貫さんはさかに勧めるのだが、私は恐ろしくて辞退した。

お茶を持って出て来た奥さんに、初対面の挨拶をする。小柄だが肉付きのしまった、癩の強そうな婦人で、中沢さんと適当に輕口の応酬を交しながら室を出てゆく。

黙って横で聞いていると、綿貫さんと中沢さんは、九州にあるコークスを阪神間に運んできて、売りさばく相談をしているようである。

中沢さんが気焰をあげて説明するところによると、長崎県の海岸では、いま、野焼のガラ・コークスというものを造りはじめている。野天にかんたんな設備をもうけて、ただ焼けばいいのであるから技術もかんたんであり、原料は北九州の炭鉱地帯から、粉になった屑炭を買ってくれば、いくらでも安く手に入る。これを固めて焼くわけだが、カロリーはほんもののコークスと大して変らない。第一、本ものの石炭やコークスと違って統制外品であるから、輸送に就いても問題がなく、江迎たわかい、歌ヶ浦など長崎県の海岸から、直接、機帆船で阪神間に引いてくることのできる。輸送のルートさえ出来れば、ガラ・コークスの

名目で本物のコークスを運ぶ楽しみも伏在する。将来、いっしょに小さな会社を設立して、この製造を計画してもよいが、さいわい、自分は日窒の幹部と知己も多く、その方の関係で自由もきくから、阪神間で特定の需要家をみつけ、とりあえず輸送と販売を分担して、長期の契約を結ぼうではないか、というのである。

二人のあいだの長火鉢のうえには、その現物らしい、熔岩のような塊りが置いてある。変にうすぎたない、不快に凝結した物質であるが、ぼつんとそこに置かれた、灰黒色の鈍い光を放つその存在が、中沢さんの話につれて、なにかしら夢を含んだ、すばらしい財宝じみて見えてくる。綿貫さんは乗り気のように、

「じゃ、当ってみるから、しばらく待ってくれ給え。しかし、現物は間違いないでしょうね？」

と、念を押している。

「だいじょうぶです。けど、私は二三日中にまた現地に発ちますから、はっきりした数量は、むこうから知らせましょうか？」

「そうして下さい」

と、綿貫さんは言い、それから私の方へ向き直って、

「ああ、渡辺君。事務所を海岸通りに決めたから、そろそろ店の方に出て貰おうか。最初
はあまり仕事もないかも知れないけれど……。まあ遊んでい給え。そうだね、あさっての
十時……。十時に元町の東口で待っててくれ給え」

と、ちょっと語を切ってから、

「まあ、給料だけじゃ仕事に励みが出ないだろうから、働きに応じて歩合制度でいくこと
にしよう。その方が楽しみがあっていいだろう。万事民主主義だ」

と、綿貫さんは意味深げに笑って、

「とにかく、今日、^{こんにち}安心して食ってゆけるということが、いちばん大事なことだと思うん
だ。ところが、君、いまの政治家たちの言うこと為すことを見給え。皆、体裁のいいこと
はいってるけど、実は周章狼狽、手前の首のつながることしか念頭にないんだぜ。これで
民衆は安んじて食ってゆけますかね。聞をするなっただって、きょう日、国民の生活から聞
を引いたら、いったい何が残るんだい。けれども、まあそんなことはどうでもいいや。こ
れからは政権が誰に移ろうともだ。我々は我々だけで食ってゆけて、気持ちよく暮らしてゆ

ける世界を作ってゆこうじゃないか。一つの仕事をするにしても、めいめいが株を持つような形にして、誰もが発言権も有り、皆が自分の仕事という気持でやってゆけるようにしようや」

と、酔に乗じて気焰をあげはじめた。

がらの悪いいちまつの不安が私の胸には残っていたけれども、その言葉につれて、長火鉢のあるこの一市民の家の六畳の部屋に、なにかしら無政府状態の桃源境のような理想の国の幻が、ふわっとひろがり流れて行って、私の胸のなかにもするすると入ってくる。

「ま、最大限に働いて、最大限に要求することにしましょう」

そのとき、中沢さんが柄に似合わない、デリケートないことを言った。

「そうだよ。私もサラリーマン根性というのが大きらいだね。退けどきが近くなると、何もしないで時計ばかり気にしている。あれじゃあ、だめだよ」

と、綿貫さんは言葉を切り、

「ところで、この人は世界一周してきたんだよ」

と、中沢さんを指して言った。

「僕のパイロットで、皆でもう一度、地球をひとまわりしたいですね」

と、中沢さんが言うと、

「地球に生れたからには、地球が丸いっていうことを、いっぺん確かめて見なくちゃあ。地球に生れて地球を知らなくちゃ話にならない」

と、綿貫さんは突然、いやに壮大なことを言いはじめ、それから私の方に向き直って、

「渡辺さん」

と、改まって、

「私が世界一周するときは、必ず君を連れてゆくよ。ええ、連れてゆきますとも……」

と、ばかに力みかえって言うのだった。私は、

「はあ、お願いします」

と、頭を下げた。

私は別にその言葉をそのまま鵜呑みにして信じた訳ではなかったが、そうやってしまうと、とつぜん、隼丸がずっと釣りあがってゆくような、妙に落着かない気分になってきた。俄かに足下の現実がぐらぐらと揺れ動いてきて、夢の世界が現実と入り混ってゆくような、

混乱した、それでいて恍惚とした気持を味わいはじめる。

帰途、私は他人から与えられた幸福感というものを初めて知った。私は、今のいままで、自分が金銭に縁のある人間だ、などとは夢にも思つたことはなかった。ただ、何処かに一応勤めることによって、生活の保証を得るかたわら、好きな文学を一生つづけてゆきたいと思つていた。

だが、待てよ、と考え直しているものが私のなかに生れ出ている。もしも一生涯食つてゆけるに十分な金を得ることができたら、文学に専心し、芸術三昧に暮らしてゆくことだつてできるじゃないか。

翌々日の朝、私はいつもより早く起きて家を出た。

妻は生まれたばかりの子供を抱いて、いそいそと私を送ってきた。阪急の窓から見える六甲の山々。戦時中から戦後にかけての乱伐や盗伐で、樹木も疎らになった針ぼての山々だが、なにか痛いほど新鮮に私のところに染みてくる。

元町に着いたのは十時すこし前だった。十時になつても綿貫さんは来ない。私はそのまま待ちつづけた。

私はこれから始まろうとする自分の運命について考え、なにかしら期待と予感で胸をはずませる。

その私の目前には、まっくろに汚れたね、ね、こで赤坊をおぶったお内儀さんが佇んで、買物籠に入れた手巻の煙草を売っている。無気味に痩せて青ざめた赤坊はへんに温和しく、まるで自分だけ独立した世界を守ってでもいるように、ほんのときおり首を左右に動かし、無関心な視線でのろのろと人間界を見まわしながら、人知れず小さな欠伸をしたりしている。なにかしら人間の赤児の顔のなかに世界の虚無が覗いている。

もんべを穿いた同じような姿形の老婆が数人、あるものは握り飯を、あるものは焼芋を籠に入れて、じっと無言で立ちつくしている。

一個五円の揚げ饅頭を売っている支那服の華奢な少女の不貞腐れた表情が、妙に兇暴な情慾を聯想させる。

十時半になったが綿貫さんはまだ現われない。もしや何か間違えているのではないかしら、と不安になってくる。

しかし確かに今日だ。そして、十時とはっきり綿貫さんは言っていた。だが、もう来る